

池袋西口公園調査研究ノート A Research Note on Ikebukuro Nishiguchi Park

関 駿平, 佐藤 裕亮, 鍋倉 咲希, 有田 将也, 庄子 諒
SEKI Shumpei/ SATO Yusuke/ NABEKURA Saki/ ARITA Shoya/ SHOJI Ryo

This paper seeks to describe various practices of users at Ikebukuro Nishiguchi Park by observing the temporal phase of a day. Ikebukuro Nishiguchi Park is the center of cultural space located in the west side of Ikebukuro station in Tokyo. This park will be redeveloped in 2019 by the local government under the cultural policy "Toshima International City of Art and Culture". The redevelopment will change park facilities' and ways of utilization. This case study will highlight on how cultural policy influences life experiences and contribute new knowledge to Ikebukuro studies (Ikebukuro-Gaku).

キーワード：池袋西口公園 (Ikebukuro Nishiguchi Park)、文化政策 (Cultural Policy)、再整備 (Redevelopment)、舞台 (Stage)

1. 池袋の再整備をめぐる問題意識

本稿は、東京都豊島区にある池袋西口公園（以下、西口公園）の1日を描き出すことを通じて、現在の西口公園で展開されている人びとの行為の諸相を明らかにすることを目的とする。この目的設定の背景には、2017年9月に豊島区から発表された西口公園の再整備計画がある。

西口公園の再整備は「東アジア文化都市」⁽¹⁾の開催記念事業の1つである「池袋駅周辺4公園の整備事業」として取り組まれている。2018年11月に着工し、2019年11月に開園する予定である新しい西口公園では、現在の設備が一新され、巨大なリング状の屋根や常設・仮設の野外ステージ、インフォメーション機能付カフェが新設される。また、移動性が高く見通しのよい空間が整備され、人びとの動線も変化する（豊島区都市整備部公園緑地課 2017）。

東アジア文化都市の背後には、豊島区が2016年来、目指す都市像として掲げている「国際アート・カルチャー都市」があり、「まち全体が舞台の誰もが主役になれる劇場都市」というスローガンのもと、文化事業や都市の再整備が進められている（豊島区政策経営部企画課 2015）。とりわけ池袋駅周辺は『池袋駅周辺地域まちづくりガイドライン』のなかで「国際アート・カルチャー都市のメインステージ」に位置づけられており、種々の計画を通じて景観が大きく変化する（池袋駅周辺地域再生委員会 2016）。こうした池袋駅周辺をめぐる一連の空間戦略のなかで、西口公園は2つのステージを持つ「野外劇場」へと、「劇場化」を遂げようとしている。

しかし、立教大学池袋キャンパスに頻繁に足を運ぶ筆者たちにとって、再整備により公園の風景が変わっていくことにはどこか違和感があった。2018年の夏ごろから、公園内の噴水や一部の植栽が撤去されはじめ、11月末にはモニュメントが移設のために撤去された。このように風景が変化すると、それまでただ眺め、ときに参加していた西口公園でのイベントやベンチでのおしゃべり、「公園飲み」などの人びとの行為が、急に輪郭を持って現れてくるようになった。

再整備が行われれば、設備だけでなく、こうした西口公園における人びとの行為も大きく変化するのではないか。再整備によって、西口公園から何かが失われるのではないか。

では、再整備によって何が失われるのだろうか。かつて、路上生活者等を支援する炊き出しの場として使われていた（と同時に、それに反対する住民の苦情的でもあった）南池袋公園は、2009年に工事という理由から閉鎖され（『朝日新聞』2009年9月12日夕刊）、2015年、西口公園と同様の「池袋駅周辺4公園の整備事業」の1つとして先駆的に再整備が行われた。この再整備によって、南池袋公園は、芝生や遊具、レストランが設置されるとともに、深夜の入園が禁じられたことで、子ども連れ向けの空間へと生まれ変わった（『朝日新聞』2016年4月2日朝刊）。筆者たちが2018年4月頃に同公園を訪れたときは、お花見をする会社員や親子、カップルなどで賑わっていた。そこには10年近く前のこの公園の影はない。

南池袋公園では、公園設備の変化や利用時間の規制の導入という転換によって、公園を利用する人びととそこで営まれる種々の行為が変化した様子がみられる。この変化は単なる公園風景の刷新として捉えられるに留まらず、誰が公園の利用者ではなくなり、誰が利用者となったのか、そして新たな利用者はいかなる行為をしているのかを問う必要性を投げかけている。「国際アート・カルチャー都市」は「誰もが主役になれる劇場都市」を目指しているが、現実には「主役」に限定性が働いているのだ。南池袋公園の例から明らかになるのは、再整備により利用者を含めた公園の風景が失われ、また、一定の利用者がこぼれ落ちていく可能性である。

したがって、西口公園においてもまた、再整備をきっかけとして公園の利用者が変化し、とくに公園内でみられる営みが現在とは大きく姿を変えることが予期される。それは池袋西口で日々を過ごす人びとの生活が変化することを意味しているだろう。こうした問題意識から本稿は、西口公園の再整備前の利用者の様子と、その人びとの行為を記録していく。

豊島区の再整備の問題を扱うにあたり、西口公園を対象とする理由は、西口公園が区の文化政策および再開発事業において、先導的な役割を期待されている点にある。西口公園は「これまでの文化、芸術、そして、新たに生まれる街の賑わいを、再開発後の池袋西口地区全体に繋げていく出発点」として位置づけられている（豊島区都市整備部公園緑地課 2017: 1）。実際、東京都のターミナル駅の1つである池袋駅に隣接する西口公園は、曜日・昼夜を問わず、いつもなんらかのかたちで賑わいをみせている。その賑わいは、地元商店会やNPO、企業などによって構成される、池袋西口公園活用協議会が運営に携わるコンサートやフリーマーケットのようなイベントによる場合もあれば、ベンチや野外ステージに腰掛けて酒盛りをする若者や年配の人びとによる場合もある。西口公園は地域住民だけでなく観光客や通勤・通学者などの多様な人びとが行き交うことから、池袋の地域性を象徴する場の1つであるといえよう。したがって、西口公園における再整備の実態を明らかにすることは、豊島区の再整備、ひいては都市における文化政策が人びとの生活に与える影響を考察することにつながると考えられる。

加えて、筆者たちが別稿の研究ノートで扱った立教大学と東京芸術劇場（以下、芸劇）の連携講座「池袋学」との関連を指摘しておこう。池袋の「文化」を扱ったはずの池袋学において、西口公園に関する言及はわずかだった。現在の西口公園は、地域の大学や公共劇場、自治体による文化政策など、「池袋の文化」を扱うあらゆる視点からの盲点となっている。

しかし、イベントの有無を問わず、深夜から早朝にかけても人が集う西口公園は、ある種の「恐さ」を感じさせる一方で、池袋において独自の魅力を持っているのもたしかである。小説やテレビドラマを通して西口公園や池袋の知名度を上げた、石田衣良の『池袋ウエストゲート

パーク』は、こうした西口公園特有の空気をすくい取ったもののひとつであろう。

2. 対象と方法

西口公園は1970年に豊島師範学校跡地に開園し、1990年代に芸劇の開館とともに再整備が行われた。面積は3,123 m²であり、主な設備の配置は図1の通りである²⁾。中央にはタイルで地面が覆われた円形の広場があり、その周囲にはベンチが並ぶ。南部には常設のステージやトイレ、喫煙所などが設置され、矢印で示した箇所には出入口がある。北部は路線バスや夜行バスが発着するバスターミナルに接している。

図の黒色の部分は利用者の滞留場所を示している。次章で詳述するように、西口公園ではベンチやステージ、植栽の脇などに人びとが座り、時間を過ごすことが多い。他方で通路としての性格も強く、人びとの往来が頻繁にみられることも特徴である。

本稿で用いるデータは、共著者5名が、2018年5月から2018年9月にかけて定期的に行った西口公園でのフィールドワークの記録をもとにしている。具体的に公園では、利用者の行為の内容、時間、滞在場所、そして利用者同士の相互行為の様子を観察した。また、パフォーマンスが行われたり、不明な点が生じたりした際には、対象者に聞き取りを行った。とりわけ、第3章の記述は、イベントのない5月25日金曜日の5時半から翌日の5時半まで行った24時間の観察と、8月3日金曜日の16時から20時まで行った観察のデータを用いている。両日とも天候は晴れ、気温は27度を超えていた。金曜日の観察では、日中は平日の公園の平均的な姿をみる事ができたが、夕方から夜にかけては、週末という要因から他の平日よりも多くの人が集う様子がみられた。

さらに、5月25日はビデオカメラで公園の様子を撮影し、観察データの確認に活用した。

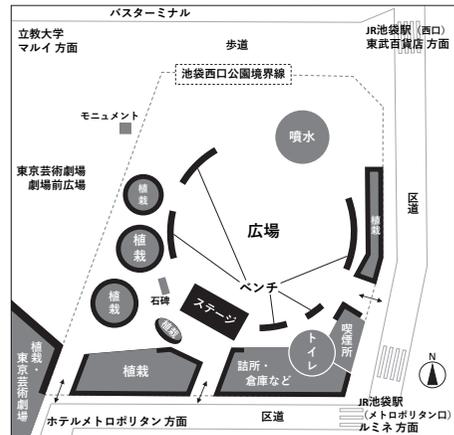
次章では、西口公園の1日を記述する。論旨を先取りすれば、公園利用のされ方は、1日のなかでいくつかのフェーズに区分される「まとめり」を持つことがわかった。それでは、各フェーズの特徴やフェーズが移り変わる様子を中心に、西口公園の1日を明らかにしていきたい。

3. 池袋西口公園の1日——移り変わる公園利用のフェーズ

(1) 「早朝のフェーズ」から「朝のフェーズ」へ

早朝5時半、始発電車に揺られて西口公園にたどり着く。静まりかえる早朝の西口公園を目にして、公園を埋め尽くすゴミの多さに衝撃をうける。大量の空き缶、酒瓶、タバコの吸い殻などのゴミと吐しゃ物。公園を囲むビル群や木々が陽の光を遮り、まだ薄暗い西口公園は「昨日」を引きずっているようにみえる。この雰囲気はゴミだけでなく、公園に滞在する人びとから漂う昨日の余韻によっても作りだされている。広場の中央に目をやれば、3人の若い男女が酔いつぶれ、硬い石畳の上で寝ている。また、芸劇前の広場には若者たちがどこからともなく

図1 池袋西口公園の設備と利用者の滞留場所 (豊島区都市整備部公園緑地課 (2017) を参考に筆者作成)



集まって、ギターを弾き、酒を飲んでおり、眠らずに夜を明かしたことがうかがえる。彼らは睡眠や帰宅を挟んでいないために、まだ新しい1日を始めておらず、昨日の延長を過ごしているようだ。ゴミについては、筆者たちが訪れた5時半より早くから、緑の腕章をつけた老年の男性が公園内の清掃を行う様子がみられた。喫煙所の前のゴミ箱から取り掛かり、ゴミ箱に入りきらず周囲に山盛りになっている大量のゴミや吸い殻を、順番にこつこつと片付けている。最初は1名だった清掃員も、6時半ごろには3名となり、手分けをして作業をこなしていた。そのころには酔いつぶれていた若者も警官の指示をうけて撤退し、ギターを弾いていた若者たちも去っていた。

7時ごろになると、公園には、池袋駅やバスターミナルに向かって歩く人びとが少しずつ現れ始める。まち全体にも陽の光が当たりだし、通路としての公園が姿を現す。8時ごろにはゴミもだいふく片付けられ、ようやく見慣れた公園になる。ベンチにも、朝食、読書、スマートフォンゲーム、ツアーや観光バスの待ち合わせなどで、公園に滞在する利用者が30~40人程度みられるようになり、人通りも増え、騒がしい朝の公園になってくる。西口公園の朝のフェーズは、通勤・通学の通路と、その寄り道としての一時的滞在の場所という性格を特徴としている。

早朝の公園は、昨夜の空気を引きずっていた。しかし、6時半ごろからは、清掃をする男性や警官の働きかけにより、次第に「昨日」の空気が薄れ、代わりに「今日」を生きる人びとが現れるようになる。こうして公園は早朝のフェーズから流動性が増す朝のフェーズに移行する。

(2) 「朝のフェーズ」から「日中のフェーズ」へ

次にフェーズが変化するのは9時ごろである。この時間になると、通勤・通学の喧騒は収束し、公園は朝のフェーズから日中のフェーズへと移行していく。日中のフェーズは、正午ごろ一時的に多少にぎやかにはなるものの、落ち着きを保ったまま朝9時ごろから夕方16時ごろまで続く。ほかのフェーズに比べこの時間に目立つのは、子ども連れの人びとの往来と、滞在者の余暇的な行為である。ほかのフェーズにおいては子ども連れをみることは稀だが、日中の公園では公園の中央やバスターミナル側の道を通る彼らを頻繁に確認することができる。

また、日中にはベンチや植栽の周囲に座って比較的長時間滞在する人びとがみられる。ぼんやりしたり携帯電話に夢中になったりするよりも、おしゃべりや飲酒³⁾、喫煙、将棋、楽器演奏などをしながら時間を過ごす姿からは、公園が余暇や社交のための場として利用されていることが読みとれる。他方で、一時的な滞在をする人も多く、昼食や休憩、「ポケモンGO」などの携帯ゲーム、待ち合わせなど、それぞれの目的で公園を利用し、短時間で立ち去っていく。

こうした日中の公園利用者の居場所を決めるのは、公園内の日当たりである。観察を行った5月25日の日中は半袖でも汗ばむ陽気であり、筆者たちも照りつける日差しに気が滅入っていた。こうした状況においては、公園内は陽光に照らされる明るい場所と、近隣のビル群や植栽によって日陰になる場所が明確に分かれる。とくに夏季には、日なたにいる人びとは短時間で去っていくことが多いが、日陰にいる人びとは長時間滞在する傾向がある。暑さを避けるために日陰を選ぶのだろう。とりわけ公園の東部にある植栽の日陰は暗くて見通しが悪く、人びとはその隙間のような空間で、日中から酒盛りをしたり、仮眠をとったりしていた。

(3) 「日中のフェーズ」から「夜のフェーズ」へ

16時ごろになると、公園の利用者が次第に入れ替わる印象をうける。日中の利用者をはじめ、

早い時間から活動していた人びとが帰路につく時間帯だからだ。17時ごろには、キャリーバックを持った人や遠足帰りの生徒、アウトドア用の服装をした高齢者など、さまざまな人びとがバスターミナルに到着し駅方面に向かっていく。そして、朝のフェーズと同様、ふたたび通勤・通学による人通りが増え、寄り道として一時的に滞在をする人びとも多くなっていく。

18時を過ぎると、公園は夜のフェーズへと徐々に移り変わっていく。夕刻を超えると、日中とは異なる人びとが公園内でお酒を飲み始め、その数も日中より多くみられるようになる。その多くは若者やスーツ姿の社会人だ。浅い時間に酒を飲む人びとは、1~2人の少人数であることが多い。やがて、芸劇の明かりが消える22時ごろになると、3人以上のグループで飲酒をする集団も目立つようになる。人びとは公園脇のコンビニエンスストアで酒やつまみを調達し、ベンチやステージ上に座り込んで飲酒を楽しむ。早朝の公園にみられた大量のゴミは、こうした飲酒形態から生まれているのだろう。

飲酒者に加えて、夜のフェーズに現れる代表的なアクターが、公園の一角で楽器演奏や歌唱、大道芸などを行うストリートパフォーマーである。また、パフォーマーではなくても、歌の練習やラップセッションをする若者のグループが目にとまる。楽器の演奏やマイクを使用した歌唱では比較的大きな音が公園内に響くことになるが、夜のまちの喧騒のなかではあまり気にならない。また、音量が大きすぎるとほかのパフォーマーに影響が及び、ときには巡回中の警官から注意が入るため、音量が大きすぎないことがパフォーマーのなかで守られているようだ。

夜のフェーズへの移行には、人通りの増加と同時に、日没も関係している。たとえば、夕方の観察を行った8月3日は、日没が18時44分であり、観察においても19時ごろを境に公園内がだいぶ暗くなり、公園内の人びとの姿は見えづらくなった。すると、公園の利用者は群島のように一定の距離を置きながら公園の随所にそれぞれ集い、自由に過ごすようになった。

つまり、夜の西口公園は、飲酒やおしゃべりを楽しむ人びとやパフォーマーが集うことにより活況を呈す一方で、公園内にいる人びとは互いに干渉せず一定の距離をとっている。夜のフェーズでは、雑多なにぎわいと同時に、個別性が保たれているのである。

(4) 「夜のフェーズ」から「深夜のフェーズ」へ

深夜に差しかかり、公園の利用者は、帰るか残るかの選択を迫られる。23時台までは多くの人でにぎわっていた西口公園も、終電や終バスがある24時から25時ごろを過ぎると15~20人ほどの人数しかみられなくなる。単独の利用者の大半は帰路につき、いくつかのグループだけが朝までの滞在を選び、公園は深夜のフェーズへと移行する。まちの明かりも消え、さらに見通しの悪くなった公園で、人びとはベンチに座ったり、ステージ上で輪を囲んだりする。また、深夜の公園は通路としての役割を失うため、広場中央の地べたに座り込むグループもある。人びとはさまざまなかたちで西口公園にとどまり、一定の距離を取りながら宴会を楽しむ。

こうして、ある人は酒を飲み明かし、ある人は眠気や酔いに負けて地べたに横たわりながら夜明けを待つ。そして、公共交通機関が動き始める時刻になると帰路につく。それでも残るわずかな人びとと大量のゴミが深夜の余韻を残しながら、西口公園はふたたび早朝を迎える。

4. 西口公園という「舞台」——その現在と今後の展望

5月25日の夜、ステージでパフォーマンスをしていた男性が「いいっすね~自由な感じで。

将棋してる人がいたりして。来てすぐわかりました。最高です！」と叫んだ。彼の言葉には、西口公園の特性が集約されているように思われる。西口公園は公園全体がステージであり、飲酒や将棋、演奏、おしゃべりなどのさまざまな実践が展開される1つの「舞台」なのである。つまり「劇場都市」における「野外劇場」への変貌を待たずして、西口公園はすでに人びとの行為と、その集合によって生まれる西口公園独特の風景が現れる舞台として存在している。

しかし、これまでの記述で明らかになったように、西口公園を舞台として営まれる人びとの実践は、毎日、あるいは1日を通して決して均質ではない。西口公園は早朝、朝、日中、夜、深夜の5つのフェーズで異なる姿をみせた。時間帯によって場の主役は変化し、それと同時に人びとの行為も変質していく。では、利用者の行為をうながし、フェーズを作りだしていたものは何だったか。今回明らかになったのは、社会的要因や周囲の環境である。通勤・通学や公共交通機関の始発・終発といった生活のなかの時間的条件に加え、季節や天候、日差しといった自然環境の条件、人びとの滞在や通過をうながす公園設備、そして西口公園で開催されるさまざまなイベントが、公園の利用者に影響を与えている。たとえば日中のフェーズでは、人びとは植栽の日陰に集って将棋や居眠りをし、また夜のフェーズでは、日没によって見通しが悪くなったことを契機に、それぞれのパフォーマンスや酒盛りが展開されていた。西口公園においては、種々の条件が複合的に混ざりあうことで、人びとの行為が生みだされ、結果的に5つのフェーズに区分されたような行為の「まとまり」が形成されている。公園を利用する主役やその行為は、時間や周囲の環境、公園設備などの「舞台装置」と無関係にあるわけではない。

再整備の問題に立ち返ると、西口公園は、再整備によって公園設備が大きく変化することが予想されている。ならば、公園における人びとの行為や公園利用のフェーズもまた、設備の変化によって変質するはずだ。人びとの行為の舞台としての西口公園は、再整備による「劇場化」を経て、どのような舞台に変貌を遂げるのだろうか。現在の公園でみられる営みは、「劇場化」によって消え去るのか、それとも別のかたちで継続していくのか。だとしたら、どのように？これらの問いを継続的に探究することにより、西口公園のみならず、豊島区における再整備や文化政策の影響を考察することが可能となる。すでに始まりつつある再整備の過程を丹念に追い、「劇場化」による人びとの営みのゆくえを追うことが、今後の筆者たちの課題である。

註

- (1) 豊島区は2019年の東アジア文化都市に認定された。東アジア文化都市とは日中韓で行っている文化交流事業であり、毎年各国1つの都市が認定され相互交流やイベントが開催されている（東アジア文化都市2019豊島準備委員会2018）。
- (2) 図1にある噴水は、2018年7月に撤去されている。
- (3) 本来、西口公園では飲酒や喫煙が禁止されており、それを示す看板が設置されている。

参考文献

- 東アジア文化都市2019豊島準備委員会、2018、『東アジア文化都市2019豊島基本計画』。
池袋駅周辺地域再生委員会、2016、『池袋駅周辺地域まちづくりガイドライン』。
豊島区政策経営部企画課、2015、『豊島区国際アート・カルチャー都市構想【解説編】』。
豊島区都市整備部公園緑地課、2017、『池袋西口公園等整備基本計画策定業務報告書』。